

「無差」第28号 2021

非日本語母語話者が日本語教師になるための支援の必要性

— 2020年度オンライン講座「使える日本語を
教えてみよう！」での調査をもとに —

中 西 久実子・井 元 麻 美

要旨

本研究の目的は、非日本語母語話者（ノンネイティブ）が日本語教師になるための支援の基盤を作ることである。この目的を達成するため、京都外国語大学において社会人のための生涯学習講座「外国人に日本語を教えてみよう」を2021年4月からあらたに開講する。本稿では、準備のために開講したオンラインの研修（京都外国語大学大学院特別講座、以下、オンライン講座）の成果と問題点を示す。

オンライン講座のテーマは文法で、反転授業の手法を取り入れた。21名の受講者が事前のオンデマンドのビデオ（20分）を視聴後に同期のオンライン講座（40分）に5回参加した。受講者を対象におこなった調査の結果、特に高い評価を得たのは、事前に視聴したオンデマンドのビデオだった。同期のオンライン講座と組み合わせることで相乗効果が得られた。また、テーマとした文法についても、調査の結果、文法の大切さがわかったとの意見が得られた。問題点として挙げられたのは、対面でおこなうグループディスカッションの時間が短いということであった。

1. 問題のありか

2019年6月に日本語教育推進法が可決され、国内外において日本語教育が円滑になるように整備が進んできている。京都外国語大学にも日本語教員養成課

程があり、この課程の主専攻・副専攻で学ぶ日本語母語話者（以下、ネイティブ）、および、非日本語母語話者（以下、ノンネイティブ）の学部生・大学院生は、毎年300～400名ほど（各学年100名弱×4学年）にのぼる。

しかしながら、国内外の教育現場では日本語教師が不足する状態が続いている。その原因としては、日本語教師になるための資格試験（日本語教育能力検定試験）の合格率が18%ほどと低く、難関であることが挙げられる。嶋田和子（2019：40）によると、日本語教師をめざす人は、「3つの技能（1 教育実践のための技能、2）成長する日本語教師になるための技能、3）社会とつながる力を育てる技能）」を身につける必要があるという。しかし、日本語教師をめざす方がこれらの3つの技能を身につけるための研修は数少なく、教師のネットワークもまだ地域にまで浸透していないため、オンラインでの研修によって基盤を作る必要がある。

そこで、本研究では、日本語教師をめざすノンネイティブの支援策として、だれでも容易に参加でき、専門知識を身につけられるようにする下記(1)の講座をあらたに作ることにした。この講座をきっかけに、オンラインで教師志望の人のネットワークができれば、「教師同士がつながり、地域社会とつながり、さらに日本語学校間でつながることで学び合う教師集団が生まれ、教師力の向上が図れる（嶋田和子（2019：36）」）からである。

(1) 講座名称 京都外国語大学ランゲージセンター生涯学習オンライン講座

「外国人に日本語を教えてみよう＜入門＞」

開講時期 2021年4月～2022年3月（通年科目）

講座の対象者 日本語教師をめざす社会人（ネイティブ、ノンネイティブ）、日本語教師

講座の概要 日本語教師の入門となるような日本語文法の講義計24回（春12回・秋12回）

ただし、(1)は初めての試みであるため、その効果を測り、より精度の高い内容での開講をめざすため、2020年8月に京都外国語大学大学院特別講座として

オンラインで試験的に準備のオンライン講座（以下、オンライン講座）を開講することにした。本稿の目的は、そのオンライン講座の成果と問題点を明らかにすることである。

本稿の構成は次のとおりである。2. では、オンライン講座の概要を示す。3. では、オンライン講座をどう実施したかを、運営スタッフの視点から示す。4. では、グループディスカッションのファシリテータからみたオンライン講座の評価を示す。5. では、受講者からみたオンライン講座の評価を示す。最後に、6. では、本稿のまとめと今後の課題を示す。なお、本稿の2. 3と2. 4. 2と3. と4. 3は井元が執筆を担当し、その他は中西が執筆を担当する。

2. オンライン講座の準備

2. 1 オンライン講座の概要

オンライン講座の概要は次の(2)のとおりである。

(2) 講座名称 京都外国語大学大学院特別講座

「オンライン講座 使える日本語を教えてみよう<入門>」

〔開講時期〕 2020年8月16日～29日 〔受講料〕 無料

〔講座の対象者〕 国内外の一般社会人、学生

〔講座の内容〕 日本語教師入門となるような日本語文法の講義計5回
(zoom使用オンライン講座)

〔スタッフ（敬称略）〕

A S（講師、京都文化日本語学校非常勤講師、京都橘大学非常勤講師）

T T（講師、京都外国語大学非常勤講師）

中西久実子（全体統括・コーディネータ、京都外国語大学外国語学部教授）

井元麻美（zoom オンラインサポート、国際交流基金ニューデリー日本文化センター日本語専門家）

〔教科書〕 中西久実子・坂口昌子・大谷つかさ・寺田友子（2020）『使える日本語文法ガイドブッカーやさしい日本語で教室と文法をつなぐ』ひつじ書房。

オンライン講座の受講者の詳細は、表 1 のとおりであった。

表 1 オンライン講座の受講者

国 籍	受講者の数
日本	9 名（うち日本語教師 4 名）
ハンガリー	6 名
中国	4 名（うち日本語教師 1 名）
韓国	2 名
タイ	1 名
合 計	22名

受講者の多くは、将来日本語教師になりたいか、または、大学院進学を目指した学部生や留学生であった。また、5 名は既に日本語学校等で日本語を教えている者であった。

オンライン講座は下記(3)の①～③のような反転授業の手法でおこなった。

(3) ① 受講者は、オンデマンドのビデオで教科書の内容について視聴する。

② 受講者は Quizlet で言語学の専門用語（例、瞬間動詞、アスペクトなど）についてドリルをして、ビデオの中で出題された課題について自分の考えをまとめておく。

③ 同期のオンライン講座は、zoom を使用する。毎回、講師の講義（20分ほど）を聞いた後、他の受講者と②の課題についてディスカッションする。

2. 2 オンライン講座のテーマ

オンライン講座のテーマは、動詞、形容詞、時を表す表現、受身、自動詞・他動詞で、日本語教育に不可欠な典型的な文法概念をテーマにした。その理由は次のとおりである。

近年日本語教育では、コミュニケーションを重視するため、文法はどちらかというと軽視される傾向がある。国際交流基金の日本語教育スタンダードで

can-do statements が整備されてからは、国内外の日本語教育機関で can-do を主軸に置いた教科書『まるごと』の使用が多くなった。このため、「もはや文法はいらない」というような極端な意見も聞かれるようになり、日本語教師は文法知識を身につけなくてもいいというように考えられることもあった。しかし、教科書『まるごと』を使って日本語は教えられるが、文法について質問されたら答えられないと困る。また、『まるごと』で教えたコミュニケーションのストラテジーがどんな文法を基におこなわれているのか知らないと、コミュニケーションの体系的な指導ができないなど弊害も生じる。そこで、本研究では、can-do リストを使ってコミュニケーションで何ができるかを積み上げていく授業でも日本語教師として文法知識は有していなければならないと考える。

2. 3 オンライン講座のスケジュール

オンライン講座のスケジュールと時間配分は表 2 のとおりであった。予定では各40分としていたが、インターネットの状況やディスカッションが活発であった。そのため、予定を 5 分から10分をこえる回もあった。

表 2 オンライン講座のスケジュールと時間配分

同期 オンライン講座	オンデ マンド ビデオ 視聴開始	担当 講師	テーマ	内容と時間配分
第 1 回 8 月 15 (土) 20 : 00 - 20 : 40	8 月 8 日 13 : 00	T T	動詞	1. 講師自己紹介 (5 分) 2. グループ分け発表, アイスブレイキング (10分) 3. グループで自己紹介 (10分) 4. グループディスカッション (10分) 5. 全体共有 (10分)
第 2 回 8 月 16 (日) 20 : 00 - 20 : 40		A S	形容詞	1. 講師自己紹介 (5 分) 2. グループディスカッション前の導入 (10分) 3. グループディスカッション (10分) 4. 全体共有 (15分)
第 3 回 8 月 22 (土) 20 : 00 - 20 : 40	8 月 18 日 13 : 00	T T	時を表 す表現	1. ビデオの内容確認 (10分) 2. グループディスカッション (18分) 3. グループディスカッションの内容共有 (15分) 4. まとめ・振り返り (2 分)

第4回 8月23(日) 20:00-20:40		A S	受身	1. 文法は何のために勉強する?(8分) 2. 受身のポイント(5分) 3. グループディスカッション(16分) 4. 全体共有(15分)
第5回 8月29(土) 20:00-20:40	8月25日 13:00	T T	自動詞 他動詞	1. 振り返り学習(20分) 2. 全体で振り返り(12分) 3. グループ相談会・懇親会(13分)

また、各回の内容に合わせて属性が均等になるようにグループを分けた。反対に、母語と日本語による比較を必要とする回では、母語別にグループを分けた。なお、母語別では、人数が少なかった韓国とタイの受講者は同じグループで話し合ってもらった。また、日本語母語話者も多かったため、日本語教師になりたい者と既に日本語教師として勤務している者に分けた。グループ分けは、表3のとおりであった。

特に、母語・日本語教師経験のバランスが均等となるグループは合計で3回あり、毎回分け方を変えてできるだけいろいろな受講者とグループが組めるようにした。また、ファシリテータの担当グループに関しては、できるだけ異なる受講者を担当してもらえようにしたり、受講者との雰囲気も含めてグルー

表3 オンライン講座の講師・グループ分けの基準とファシリテータ（敬称略）

回	講師	グループ分け基準	ファシリテータ
第1回	T T	母語や日本語教師の経験不問の混合グループ5つを運営側が作成	A S, T T, K H, M Y, K A, 中西, 井元
第2回	A S	母語や日本語教師の経験不問の混合グループ5つを運営側が作成	A S, T T, K H, K A, 中西, 井元
第3回	T T	母語別のグループ5つを運営側が作成	K H, N E, K A, 中西, 井元
第4回	A S	母語や日本語教師の経験不問の混合グループ5つを運営側が作成	A S, T T, K H, N E, M Y, K A, 中西, 井元
第5回	T T	下記の5グループに希望者が自由移動 A 日本語教師になりたい人 B 1・B 2 大学院進学したい人 C 日本語学校に勤務する人・したい人 D その他	A S, K H, M E, N E, M Y, K A, 中西

ブを決めた。そして、第5回に関してのみ、ファシリテータの経験がいかせるグループへ振り分けるようにした。

2. 4 オンライン講座の準備

2. 4. 1 オンライン講座当日までの運営スタッフの準備

オンライン講座の当日までは、以下(4)のような準備をおこなった。

(4)

2020年4月	web 会議システム zoom を講座に運用するための解説書を試作（井元）
2020年4月23日～5月11日	オンデマンドで配信するビデオ試用品の作成（9本）完成（A S、中西）
2020年5月15日(金)	第1回スタッフミーティング（A S、T T、中西）
2020年5月～6月	非同期でオンデマンド配信のビデオについて原案を作成（A S、T T、中西）
2020年6月26日(金)	第2回スタッフミーティングで内容を確定（A S、T T、中西、井元）
2020年6月30日(火)	第3回スタッフミーティングで運営の方針を確定（中西、井元）
2020年7月	非同期でオンデマンド配信のビデオについてシナリオを作成（A S、T T、中西）
2020年7月28日(火)	第4回スタッフミーティングで当日の運営の方針を確認（中西、井元）
2020年7月31日(金)	第5回スタッフミーティングで講座の内容を再確認（A S、T T、中西、井元）
2020年8月	オンデマンドで配信するビデオの内容についてシナリオを作成（A S、T T、中西）
2020年8月8日(土)	ビデオの視聴開始

主に受講者やスタッフの動きを統括したスタッフ（執筆者井元）は、2020年7月の第5回スタッフミーティングの前後に、下記(5)を準備した。

(5)

- ・コンピュータの確保（メイン（講師用）1台、運営用1台、録画用3台）やネット環境の確認（カメラとマイクの試用、ヘッドセットの予約など）
- ・インターネット状況・授業の環境を確認して、運営として対応が必要そうな部分（どのコンピュータが講師用、運営用に向いているコンピュータか、マイクのハウリングの状況など）を先に考えておく。
- ・講義後のディスカッションのグループ分け（5グループ）、ファシリテータの分担決定
- ・Zoom ミーティングの開催を予約
- ・講師向けに簡単なマニュアルを作成
- ・Zoom の使い方を講師に説明

2. 4. 2 オンライン講座当日の運営スタッフの準備

主に受講者やスタッフの動きを統括したスタッフ（執筆者井元）は、オンライン講座の当日に、下記(6)を準備した。

(6)

- ・早めにコンピュータの準備をし、インターネットやコンピュータに問題がないかを確認した。
- ・同期オンライン講座の開始後、何分でブレイクアウトルームを使用するかを講師に確認した。
- ・ファシリテータの担当を再確認した。

しかし、第1回のオンライン講座の実施後、円滑に運営ができていないと思われる点があったため、以下の改善を加えることにした。

- ・ブロードキャストや講師のインターネット接続にトラブルがあった時の対応として、講座で使用する資料（パワーポイントのデータ）を事前に受け

取っておく。

- ・ファシリテータが自分の役割を理解できていないと受講者が不安になるため、「当日のオンライン講座の内容とファシリテータの役割」をファシリテータに伝えるよう講師に依頼する。
- ・同期オンライン講座のブレイクアウトルームでディスカッションをする場合、メモがないとファシリテータが行動しにくいいため、予めファシリテータにどのように Google document を使用するのかを説明しておく。

3. オンライン講座の実施

3. では、オンライン講座の実施の詳細を示す。講座の開始時間は日本時間 20:00であるため、講師・スタッフは17:30ごろに準備を開始した。主に受講者やスタッフの動きを統括したスタッフ（執筆者井元）は、オンライン講座の授業中は、下記(7)のことをおこなった。

(7)

- ・欠席者やネット環境などがよくなかった受講者のメール対応
- ・講師には「★★」をつけ、ファシリテータには「★」をつけすぐ見つけて対応できるようにした。
- ・受講者の表示名変更
- ・チャット対応
- ・雑音が入った際に雑音が出ている人をミュートにした。
- ・講師がパワーポイントなど資料を画面共有し、チャット画面を見落としている場合はチャットに書かれた内容を隣で伝えた。
- ・ブレイクアウトルームを事前に作成した。
- ・出席確認をしながら、人数に合わせてブレイクアウトルームの割り振りを考え、行った。

受講者やスタッフの動きを統括したオンライン運営スタッフ（執筆者井元）は、第1回の対面授業のとき下記のような問題点を3つ発見した。

第1の問題は、受講者の表示名である。第1回は、受講者は任意の表示名だけでzoomに入ってもらった。しかし、それではzoomに入ってきた人がだれなのかかわからず出席確認が容易ではなかった。受講者の申込時と対面授業時で表示されている名前が異なる人がいたためである。そこで、改善策として、第2回以降は受講者全員に、下記のように通し番号と#、ブレイクアウトルームのグループのアルファベット（AなどIを追記した。受講者へは、事前にメールで表示名を送り、Zoomに入る前に表示名を変更するように依頼していたが、自分で変えられない受講者もいた。その場合はスタッフ（執筆者井元）が変更した。

【改善前】Tanaka 【改善後】01#A Tanaka

第2の問題は、グループ分けの問題である。オンライン運営スタッフは、参加者でもなく、講師でもなく、ファシリテータでもなく、影のスタッフとして、メール対応、チャット対応、講師への対応などをする。しかし、これらの対応をしながら、グループ活動のグループ分けを当日に行うことは容易ではなかった。そして、だれがどのグループなのか一目でわからなかったためである。そのため、zoomに入ってきた人が講師なのか、受講者なのか、だれなのかかわりにくいし、どのグループなのかもわからないという問題が生じた。改善策として、まず、講師とファシリテータには「★」マークをつけて受講者と区別し、さらに、下記のように名前の後ろにグループのアルファベット（Aなど）を追記した。すると、第2回以降はスムーズにグループ活動ができた。

【改善前】★Tanaka 【改善後】★A Tanaka

第3に、ブレイクアウトルームでの活動の際にもいくつか課題があった。

まず、講師がいくつかタスクを与えブレイクアウトルームでグループ活動を行う際、人によっては聞き逃していたり、誤解があったりすることがあった。これらの問題を回避するために、第2回以降は、対面授業を担当する講師から事前に資料（パワーポイントなど）を受け取っておき、同期オンライン講座が始まったら、その資料から必要な文をコピーして、ブロードキャスト機能で、ブレイクアウトルームの各グループへ通知を行うようにした。

また、グループ活動のファシリテータも第1回は円滑にファシリテーションができなかった。そのため、第2回以降は Google document に受講者が話し合ったことをファシリテータがメモするよう依頼した。ファシリテータにメモをとってもらうことで全体共有の際の視覚的資料、発表者のメモとして使用できるからである。

上記3つの問題は改善した結果、第2回以降は、運営スタッフも参加者もスムーズに作業を進められた。

4. オンライン講座の評価

4. 1 ファシリテータからみたオンライン講座のメリット

2020年8月29日にオンライン講座が終了した後、ファシリテータにアンケート調査をメール配信した。調査の内容は以下の(8)のとおりである。

(8)

質問1. この講座について参加してよかったと思える点は何ですか。

質問2. この講座について「ここはもっとこう変えたほうがよい」という改善点は何ですか。

アンケート調査の質問1（この講座について参加してよかったと思える点は何ですか）への回答は、分類すると、大きく分けて以下ようになった。回答数が多い順に上から並べると下記1)～5)になる。

- 1) 多様な受講者とコミュニケーションでき、気づきがあった。
- 2) 文法の大切さがわかった。文法をどういう場面で教えればよいかがわかった。
- 3) 運営がスムーズでよかった。
- 4) ノンネイティブの実情がわかった。
- 5) 日本語教師への親近感が感じられた。

ファシリテータ全員が一致して回答したのは、「多様な受講者とコミュニケー

ションでき、気づきがあった」ということであった。実際の回答は下記(9)のとおりである。

(9)

- ・一言で「場面」といっても、地域差や文化差が大きいことを改めて感じた。年代や時代背景の変化や違いも大きいとわかった。(NE)
- ・いろいろな国、地域の人と意見交換ができた。(KH、ME、NE、MY、KA)
- ・受講生が多国籍で、他(多)言語と日本語の違いにふれることができた。(ME)
- ・日本語教師ではない日本人の方のお話も聞けて新鮮だった。(MY)
- ・大学生の新鮮な日本語への思いを聞いたことは嬉しい驚きでした。(KH)
- ・日本語教師経験のある人、大学院で研究中の人、これから日本語教育の世界に入ろうとしている人との対話ができた。(ME)

次に、多かった回答は、「文法の大切さがわかった。文法をどう使うかという場面を考えることの大切さもわかった。」ということである。実際の回答は下記(10)のとおりである。

(10)

- ・文法を教えるということの意味を再確認できました。(KH)
- ・一つの文法事項を中心に、多言語とその文法のあり方について考え直すことができました。(KH)
- ・時間に余裕のある1週間では3、4冊の文法書をひっくりかえしながら読めたので、文法の用法、専門用語、文法の使う場面などについて理解を深められた。(ME)
- ・動詞、形容詞、受身、すぐにでも授業で使えそうな‘How to’をビデオで見せていただいたことはとても参考になりました。(KH)
- ・「場面」で教えることを意識することが、結果的に文法を深く学ぶことにつながった。(NE)

- ・文法を知る上で、知識としてもっているだけでなく、場面やどうしてこの文法が必要なのかについて考えることができた。(ME)
- ・それぞれの状況で必要とされる場面について考えることができた。(MY)

第3に多かった回答は、運営がスムーズでよかったという回答である。実際の回答は下記(11)のとおりである。

(11)

- ・オンライン講座では、前半の20分で教科書や動画、Quizlet で学んだことの最復習ができて、グループワークに挑みやすかった。(ME)
- ・反転授業体験ができた。動画がみやすく、聞きやすかった。(ME)
- ・テキストと Quizlet と動画の多彩な学習方法がよかった。(ME)
- ・ディスカッションの各グループにファシリテータが配置されていてよかった。(ME)
- ・グループワーク中は自分の発表で頭がいっぱいになりがちだが、ファシリテータがメモを取ってくれたので、メイングループでの発表にも対応できた。他の発表もふりかえることができた。(ME)
- ・今回は、サポーターが多数おられ、各所て対応されており、とてもスムーズでした。(ME)
- ・動画や Quizlet、オンライン講座のまとめノートなど自学習への細かい配慮に驚きました。(ME)
- ・今回の講座では、オンラインでの教師研修のヒントを多くいただくことができました。(ME)

その他に、ノンネイティブの実情がわかったという下記(12)のような意見もあった。

(12)

- ・ノンネイティブの日本語教師にどの程度の日本語レベルでの説明が有効かわかった。(NE)

- ・ノンネイティブの日本語を教える方の意見を聞けたこと。(KH)
- ・他の日本語教師の先生の考え方を知ることができ、日本語を学んでいる人が何を求めているか聞くことができた。(MY)

そして、「教師が実際に教える時に困ったシーンをオンライン講座で話してくれたので、授業風景のイメージができ、日本語教師をより身近に、自分の近い将来として感じられた。(ME)」との意見もあった。

4. 2 ファシリテータからみたオンライン講座のデメリット

アンケート調査の質問2（この講座について「ここはもっとこう変えたほうがよい」という改善点は何ですか）への回答は、以下であった。もっとも多かった意見は、「ディスカッションの時間が短かった」ということである。実際には5回の講座のディスカッションの平均時間は5～10分であったためである。実際の回答は以下(13)のとおりである。

(13)

- ・ディスカッションの時間が短すぎました。(KH)
- ・時間が短かった。長すぎてもだれるが、60分ぐらいあれば話し合いのあとのフィードバックを深めることができると思う。(NE)
- ・時間が短かったためグループディスカッションは討論というよりはそれぞれの意見を発表して終わり、あるいは全員が発表できず終わってしまいました。(MY)
- ・毎回の講座の時間が40分では厳しいものがありますが、例えば一コマは先生の講義、次の一コマで討論、という感じだとゆっくり話せるかなと思いました。(MY)
- ・一度に3点ほどディスカッションテーマがありましたので、限られた時間の中で、どれから話していいか、迷うことが多く、可能なら、1点ずつ話し合いたかったです。(KH)

4. 3 オンライン運営担当者からの振り返り

4. 3では、オンライン運営担当者がオンライン講座を担当し、考察したことを述べる。また、執筆者（井元）は、日本語教師として日本語教師の立場や学習者の立場からの意見も述べる。本オンライン講座は、グループディスカッションが短くなるなどの課題はあった。しかし、受講者からのアンケートによると満足してくれたため、オンライン講座は成果があったと考える。

執筆者（井元）は、本職で同期型・非同期型の日本語講座や日本語教員養成講座を2019年から担当している。2020年3月以降は、同期型の日本語教員養成や日本語学習者へのイベントを担当している。そのため、Zoomを使用したオンライン講座の実施をあまり難しいとは考えていなかった。しかし、実際行ってみると予想もしなかったことが起こることが多々あった。過去に複数の教員で同期型教員養成講座を運営した際は、運営側がそれに十分慣れていた。

しかし、今回のオンライン講座の講師は、対面授業や一对多の同期型授業に慣れている教師であったが、複数の教員で行う同期型授業は初めてであった。したがって、それを経験したことがある執筆者（井元）から予め下記(ア)～(オ)のような情報共有をしておくべきであった。

<複数の教員が同期型のオンライン講座を行う際の運営側の注意点>

- (ア) 講師がどの程度アプリやソフトに関して知識・経験があるのかを確認し、把握しておく。
- (イ) 講師が授業でどのような活動を行うのかを事前に聞き、受講者が活動に円滑に参加できそうにないと予測される場合は、それを解決できるようなアプリなどの使用を提案しておく。
- (ウ) Zoomのブレイクアウトルーム機能を使用する際、どのタイミングで使用するのか確認しておく。
- (エ) 講師のインターネット環境が悪くなった際に、補助ができるように講座で使用する教材をデータで事前に受け取っておく。
- (オ) ブレイクアウトルームでのディスカッションを行う際は、5名以上になる

場合は話し合いが円滑に進めにくいため、4名ぐらいでディスカッションできるようにする。

次に、講師の立場からは以下のようなことが必要だと思われる。

<複数の教員が同期型のオンライン講座を行う際の講師の注意点>

- (カ) いつどのタイミングでどのアプリを使用するか、また、どのタイミングでブレイクアウトルームなどを行うのかを教案に付け加えなければならない。
- (キ) 同期型授業でオンラインサポート者がいる場合、オンラインサポート者にいつブレイクアウトルームを使用するのかや授業の流れなどを伝えておかなければならない。また、教材なども予め共有できるよう提出しておかなければならない。
- (ク) 初回のブレイクアウトルームを開始する前に「自己紹介から始めてください」と伝えておかなければならない。そうしないと、ブレイクアウトルーム内のコミュニケーションが滞る恐れがある。

最後に、過去に同期型の学会やセミナー等に参加した経験から、今回のオンライン講座を参加者の立場として考察した結果、以下のことが必要だと考える。

<複数の教員が同期型のオンライン講座を行う際の受講者の注意点>

- (ケ) 初めて会う参加者同士でグループディスカッションをする場合、ファシリテータがいる方が話し合いがスムーズに進む。ファシリテータがいない場合は、慣れた参加者がファシリテータのような役割をするように依頼するとよい。
- (コ) 初めて会う参加者同士でグループディスカッションをする際は、メモできるファイルがあると、全体共有のとき便利である。ファシリテータがいない場合は、慣れた参加者に Google document などに何をしなければならないのか、メモしてもらうよう依頼する。

今回、オンライン講座でオンライン運営担当者として、さまざまな視点から観察することができた。オンライン運営担当者としては、いかに講師や参加者に同期型で行っていることで負担をかけないかという視点で注意深く観察できた。そして、講師視点では、複数名で運営を行う際は1人で同期型の授業を行

うことに付け加えて注意する視点を増やしておかなければいけないことに気付くことができた。最後に、過去に同期型の学会やワークショップに出席していたからその視点であり、同期型の授業を行う際にとても大事なことだと学んだ。

5. 受講者からみたオンライン講座の評価

5. 1 受講者からみたオンライン講座のメリット

2020年8月にオンライン講座の終了後すぐ、受講者19名に対して事後評価のためのアンケート調査（Google フォーム）をおこなった。その結果を以下に示す。

質問1「授業に積極的に参加したか」、質問2「このオンライン講座に満足したか」の回答は、図1、図2に示すとおりである。いずれも受講者19名の80%前後が賛成と回答した。このことから、このオンライン講座は、おおむね成功という成果が得られたと言ってよいだろう。

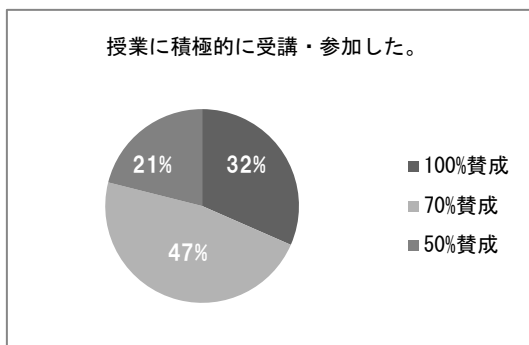


図1 積極的に参加したか

受講者が積極的に講座に参加できたのは、対面授業の前に視聴したオンデマンドのビデオの中に対面授業のディスカッションで話し合う課題を入れておいたことではないかと思われる。事前に用意した自分の意見と他者の意見をすり

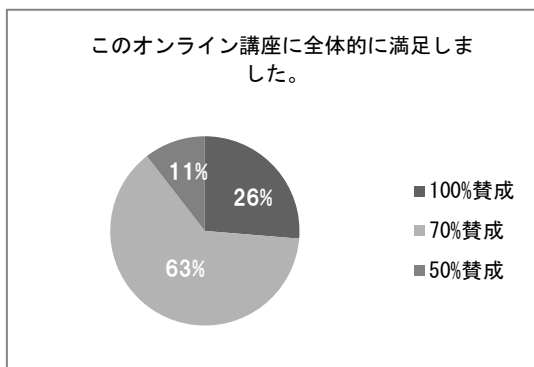


図2 満足できたか

あわせることに同期型のオンライン講座の意義が見いだせるようになる。

では、オンライン講座のメリットとデメリットはどうだろうか。

図3からわかるように、オンライン講座を振り返って受講者が良かったと評価したのは、オンデマンドのビデオだった。95%の受講者が70%以上の満足度で「役にたった」と回答した。

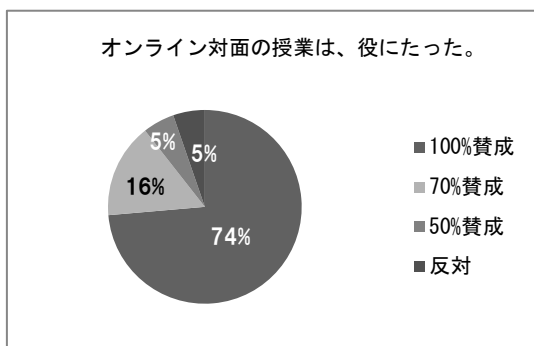


図3 対面授業の効果

さらに、図4からわかるとおり、対面授業についても90%の受講者が役に立ったと評価している。

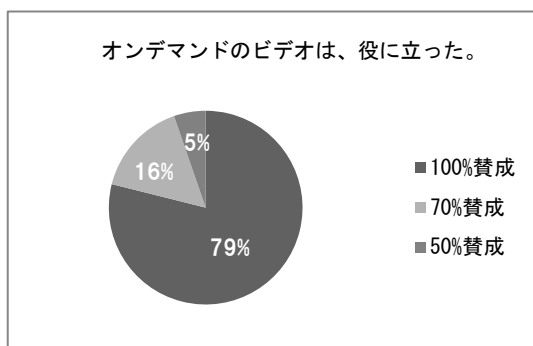


図4 オンデマンドのビデオの効果

では、受講者の満足度を裏付けるものは何であろうか。表6からわかるとおり、受講者はこのオンライン講座から十分な知識が得られたため、役に立ったと評価したことがわかる。

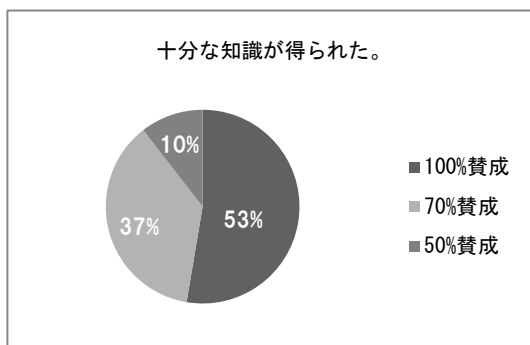


図5 講座のメリット①

さらに、表6からわかるとおり、受講者が文法の大切さに気づいておもしろいと感じたことが講座を肯定的に評価する原因の一つになっていると考えられる。

最後に、日本語を教えた気持ちについて問うたところ、図7のような回答を得た。ここで注目したいのは、日本語母語話者も非日本語母語話者も日本語

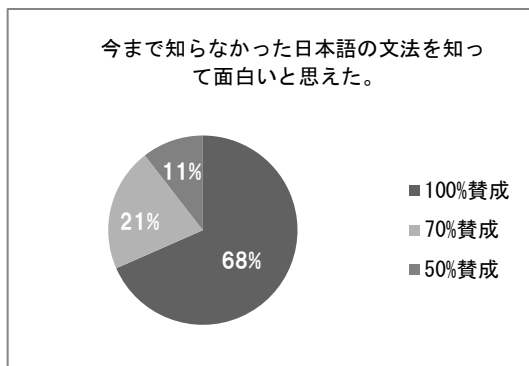


図6 講座のメリット②

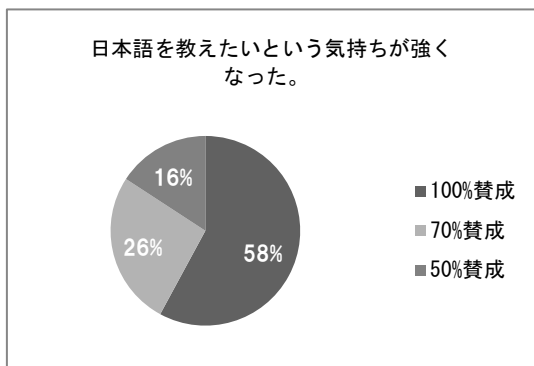


図7 講座のメリット③

を教えたいという気持ちになったという結果である。日本語母語話者は9名中5名が100%賛成と回答し、非日本語母語話者は、10名中6名が100%と回答した。

その他、自由に所感を書いてもらう欄には以下のような意見が寄せられた。オンデマンドの事前学習ビデオが高い評価を得たことがわかる。

- ビデオの長さはちょうどいいと思います。授業の時間の方が少し足りなかったと思います。グループワークを含めて、1時間半ぐらいなら、良いと思

います。色々な国の人々と話しができて、とても楽しかったです。この講座を作ってくれて、本当にありがとうございました。今後もよろしくお願いします。

- ・動画がとても事前学習に役に立ちました。

その他に特記しておくべきこととして、ホームページの評価が高かったことを挙げておきたい。本研究では、オンデマンドのビデオの置き場としてホームページを開設した。そして、同期オンライン講座の zoom リンクもホームページでパスワード付きで発信した。このホームページは開講期間の 2 週間のあいだは執筆者によるブログも毎日更新していたので、受講者が親近感をもつ手立てとなった可能性がある。受講者からのホームページに関するアンケートの回答は下記のとおりである。

- ・ホームページは普通に読みやすくて分かりやすかったですが、今はアクセスできなくなりました。教科書の内容を基にしたビデオはとても役に立つ教材だと思いますので座後もホームページをアクセスできるように設定していただきたいなとも思いました。
- ・オンライン講座のホームページで、受講生同士で話せるルームがあったらよかったと思います。普段も日本語教育について意見交換したかったからです。

5. 2 受講者からみたオンライン講座のデメリット

受講者は、アンケート調査で、オンライン講座のデメリットについて以下のような記述をしている。時間が短かったという意見が多数寄せられた。

- ・率直に申し上げると、40分という時間が少し短いなと感じました。もう少し時間が長ければもっといろいろな話を聞けたり、よりよいディスカッションもできたのではないかなと思います。またせっかくの機会だったので、もっとたくさんの外国人の方とお話する機会があったらよかったなと

思いました。

- 講座の時間が短かった。
- オンライン講座は面白くて、楽しくて、勉強になりましたが、時間がもう少しほしかったです。
- オンライン授業の時間をもっと長くしたほうがいいと思っている。

その他に教科書の購入についての問題も挙げられている。

- 意外と分かりやすく、明るい雰囲気の講座で参加させていただきとてもありがたく思います。楽しくて、参加者みんなと実際に会う機会があったとすれば仲良くなれそうです（笑）少し困ったのは教科書の購入が言えます。実はなぜかハンガリーからはデジタル版もアマゾンから買うことができませんようで（著作権の関係で）、そこでハンガリーに住んでいない友達のほうに頼まないとはいけませんでした。最初は購入ができなさそうで困りましたが結局なんとなく解決できました。したがって、なんかアマゾン以外のもっと易しい購入の方法（主催者である先生の方々から直接買うこととか）があればいいなと思いました。

6. おわりに

6. 1 本稿のまとめ

本稿では、社会人のための生涯学習講座「外国人に日本語を教えてみよう」の開講の準備として実施したオンライン講座（2020年8月京都外国語大学大学院特別講座）の成果と問題点を明らかにした。調査の結果、特に高い評価を得たのは、事前に視聴したオンデマンドのビデオだった。対面の授業と組み合わせおこなったことで相乗効果が得られた。また、近年日本語教育では、コミュニケーションを重視するため、文法は軽視される傾向があるが、調査の結果、文法の大切さがわかったとの意見が得られた。

また、近年日本語教育では、コミュニケーションを重視するため、文法は軽視される傾向があるが、本研究の結果、受講者からは、「日本語を教えたみたいという気持ちになった」「満足だった」「十分な知識が得られた」など肯定的

な評価が得られた。また、グループディスカッションのファシリテータからは、「多様な受講者とコミュニケーションでき、気づきがあった。」「文法の大切さがわかった。文法をどういう場面で教えればよいかがわかった。」「運営がスムーズでよかった。」「ノンネイティブの実情がわかった。」「日本語教師への親近感が感じられた。」など肯定的な意見が聞かれた。

問題点として挙げられたのは、対面でおこなうグループディスカッションの時間が短いということであった。

6. 2 今後の課題

6. 1 で示したとおり、オンライン講座にはメリットもデメリットもあることが明らかになった。2021年4月には、予定通り、社会人のための生涯学習講座「外国人に日本語を教えてみよう」が開講されるが、本研究の成果をもとに講座の精度を上げていきたいと考えている。講座を運営していく過程でさらなる成果と課題が出ると思われるが、本研究を継続していき、さらに質の高い日本語教員養成ができるように努めていくことが今後の課題である。

謝辞

本研究は、京都外国語大学学内共同研究の助成を受けています。また、オンライン講座の開講までの準備には、京都外国語大学ランゲージセンター長 由井紀久子先生、土井朋さん、沼田真樹子さん、松井きょう子さん、寺田友子さん、青木さやかさんに大変お世話になりました。記してお礼を申し上げます。また、オンライン講座では、駒井裕子さん、松本絵美さん、南由希子さん、糠野永未子さん、柏木あいさんにボランティアでご協力いただきました。ありがとうございました。

参考文献

- 上田和子（2019）「日本語教員養成プログラムの検証－教育実習記述の分析から－」
『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』66 p.1-11
岡崎敏雄・西川寿美（1993）「学習者のやりとりを通じた教師の成長」『日本語学』12

pp.31-41 明治書院

- 佐藤香織・菊池律之（2019）「日本語教員養成課程における教育実習のありかたに関する一考察－課程科目と教育実習の有機的な連携を目指して－」『北海道教育大学紀要. 教育科学編』69-2 pp.135-145
- 嶋田和子（2019）「日本語学校における教師研修の課題と可能性－学び合う教師集団とネットワーキング」『日本語教育』172 pp.33-47 日本語教育学会
- 千葉朋美・武田素子・廣利正代・笠井陽介（2018）「「まるごと（A1）教師サポート付きコース」の運用と成果：オンラインコースにおける学習者支援」『国際交流基金日本語教育紀要』14 pp. 51-66 国際交流基金
- 中西久実子・井元麻美（2019）「日本語教員養成課程の日本語教壇実習と外国人企業研修生の日本語学習－日本語教員志望の実習生のメリットと学外から通う日本語学習者のメリット－」『国際言語文化』5 pp.15-32 国際言語文化学会
- 春原憲一郎・横溝紳一郎（編著）『日本語教師の成長と自己研修－新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして－』 凡人社
- 藤平愛美・鈴木基伸・西尾信大・今西利之・渡辺史央・小森万里・加藤均（2019）「日本語教育実習における遠隔授業見学の有効性と課題」『大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究』17 pp.29-47
- 藤本かおる（2019）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究－担当教師へのインタビューを中心に－」『JeLA 学会誌』19 pp. 27-41
- 松尾陸（2010）「教師の熟達化と経験学習」『日本語教育』144 pp.26-37 日本語教育学会
- 山本忠行（2020）「大学通信教育部における日本語教員養成の意義と課題－生涯学習と社会貢献－」『通信教育部論集』23 pp.12-33 創価大学通信教育部学会
- 義永未央子（2020）「日本語教師の資質・能力観の変遷と今日的課題」『社会言語科学』23-1 pp.21-36 社会言語科学会